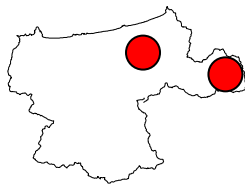


モデル事業名	「まちなか」と「中山間地域」の老人世代交流事業
活動団体名	特定非営利活動法人ラーバンマネジメント
ホームページ	http://rurban-p.sakura.ne.jp/npo.rurban-p.com/index.html
所属/ 担当者名	事務局 中野敬教
連絡先	TEL : 0857-37-0257 Email : rurban@rurban-p.com
活動地域	トトリケン トトリシ セキョウチク ワジチク 鳥取県 鳥取市 遷喬地区、上地地区

● 活動地域の概要

NPO法人ラーバンマネジメント（理事長 加嶋襄）が国交省の「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業に、『「まちなか」と「中山間地域」の老人世代交流事業』名で公募し、採択となり提案した事業を進めています。今回、交流した「まちなか」とは、鳥取市の中心市街地にある遷喬地区【約1000世帯、人口2500人】、「中山間地」とは、この遷喬地区から北東に約20キロ山間にある集落で【53世帯、人口105人】の国府町上地(わじ)地区です。いずれも高齢化が確実に進んでいる地域です。

国府町上地地区の「扇の里グループ」と共催の協力体制と、「遷喬地区まちづくり協議会」の後援と支援体制によって、事業に取り組む事ができました。



【位置図】鳥取市



【鳥取市遷喬地区】

● 活動地域の課題

まちなかの人的資源を結集するコミュニティ施設を確保し、そこを拠点に「まちなか」と「中山間地」の住民の交流を開始する。特に、「まちなか」で朝市の恒常化を試みることで「中山間地」の農林漁業関係者、即ち、双方住民の積極的な交流(元気をもらい、元気を与える)を進める。

地方自治体の財政逼迫が行政執行力の硬直化となり、地域住民は将来に対する不安を一層募らせている。地域の不満を解消することこそ、地域に元気を取り戻す最良の試みである。

元気を取り戻す要素は、1に知恵と経験、2に確かな判断力、3に持続する意志である。これらを推進出来る主力メンバーは、年齢層が50代後半から60代そして70代の前半の方々である。このことは、「まちなか」でも「中山間地」でも共通しており、地域コミュニティの活性に向けた取り組みができる課題である。

● 活動の内容

・平成21年度

①鳥取市の中心地区（遷喬地区）の空き店舗対策に配慮し、「まちなか」と「中山間地」の経験豊かな人的資源が気楽に集えるコミュニティ施設を確保すること。

◎遷喬地区の元魚町1丁目の空き店舗を借りて、「よりあい処元一」を開設した。

②遷喬地区内で「魚と野菜の朝市開催」とその恒常化を目指す試みを実施した。

◎11月と12月の毎週土曜日に試しとして、「土曜朝市」を計8回開催。

◎場所は元魚町1丁目「よりあい処元一」を魚店とし、隣の鳥飼尚美堂店舗を野菜店に借り、国府町上地の「扇の里グループ」が、野菜を出荷販売した。

◎開催時間は8時～10時の2時間。

◎朝市で買いたい品物については、9月上旬に遷喬地区17町内の60歳代の方を中心に、朝市買い物調査を行った。

◎本年1月に朝市開催で顧客となられた方々に、朝市の内容と感想についてお買い上げ調査を行った。

③「まちなかと中山間地の老世代交流会」を開催し、双方地域の住民が元気になり、元気を与えられる、ワークショップ並びに講演会を企画実施した。

◎一回目 12月13日（日）遷喬地区公民館で開催。参加者40名。

◎二回目 1月24日（日）国府町上地扇の里交流館で開催。参加者45名。

◎三回目 2月21日（日）遷喬地区公民館で開催予定。予定参加者50名。以上が、主に取り組んでいる事業です。

● 活動の成果

・平成21年度



【寄り合い処元一】



【あさいち風景】



【第2回交流会】

老人が集えるコミュニティ施設について

- ◎物置状態であった空き店舗が整理され、人の集まれる場所、施設として変わった事でまず、その町内の住民に人が寄り合う場所が出来たことへの期待が感じられた。
- ◎11月から土曜日毎に、朝市の場所となり普段の日の集まりが増えるかと期待したが、利用状況は伸びていない。

朝市の開催について

- ◎9月に遷喬地区のお年寄りの女性を中心に、朝市で買いたい物についてアンケート調査を100名弱の方にお願ひした。回答が95名あり、品目では魚介類の希望が一番であった。続いては野菜類であった。
- ◎魚と野菜の朝市用売場を同町内に並んで確保出来た事と、駐車場も朝市会場の前に住んでいる方のご好意でお借りでき、出店者を煩わすことなく大変ありがたかった。
- ◎元魚町一丁目の町内の皆さんが喜んでお買い上げにも協力を頂き、久しぶりに朝市の幟旗も出て、土曜の朝に賑わいを楽しんで居られた。
- ◎魚屋さんが時期的なこともあり、品数を十分用意出来なく、すぐ売り切れとなり、魚への期待感が薄れてしまった面があった。
- ◎野菜の生産者である上地地区の扇の里グループとの交渉が、10月となり、朝市を想定した作付けが出来ていない為、品目の種類と数を確保する手間を煩わせ、その事で初めの内は売りに影響し申し訳なかった。
- ◎上地地区はお正月用のお餅を予約注文で毎年受けている実績があり、今回の朝市でも申し込み受付を行った。食べられた方の評判は大変良かった。

交流会の実施について

- ◎上地地区には、第一回目の遷喬地区での開催は参加要請を伝えていた。遷喬地区にはまちづくり協議会より各町内会長への呼びかけと開催チラシを各戸に配布した。
- ◎第一回目は、「生き甲斐」をテーマに各地区が老世代の現状を整理発表し、全員が自由に話し合う形式で行った。「遷喬地区」の報告では、高齢化率31.8%、「上地地区」の報告では、高齢化率60.0%であった。参加者がそれぞれ現状の「生き方」について、片意地を張って何かに取り組むという形ではなく、「食べる・動く・話す」ことを毎日元気にできれば長生きにつながるのではと、「まちなか」からの報告。「中山間地」は、高齢化で集落機能の維持が難しくなってきたが、自然と農業、祭りと盆踊りそして神社等の歴史的なものも含めて、我々の代においてはしっかり元気を出して守り、伝えていきたい。と報告があった。
- ◎参加者全員に発言の機会は無かったが、それぞれ発言者の素直な取り組みの実情は、わかりやすく納得のいく交流会となった。
- ◎第二回目は、会場を国府町上地の扇の里交流館で行った。上地からの参加者が気楽に参加できた事が良かった。
- ◎テーマを「むらじまん・まちじまん」とし、ワークショップ形式とした。それぞれの自慢を書き込んで行くことと、整理して発表される内容により知らなかった生活環境の確認が始まり、双方の交流が意義深いものとなった。
- ◎打ち解けて行く中で身近な知人、友人、遠縁関係等の話題もあり、自然に理解と意識が高まり、「生きていることの良さ」を改めて認識出来た交流会であった。

● 今後の課題及び展望

コミュニティ施設と朝市の継続について

- ◎中山間地の上地地区からは、まず朝市の継続により、まちなかとの交流による集落との結びつきを強く大切なものしたいとの要望が強い。
- ◎交流会で扇の里の山菜弁当を食事したことにより、山間の集落に出かけて山菜の採取と調理の指導を学びたいとの意識が、「まちなか」に高まっている。
- ◎上記、双方地域の要望を今後、継続可能な事業とするには、NPOとしての活動とその取り組みへの位置づけが求められている。しかしながら助成金があって今回の事業が提案できている現状を認識して、柔軟にこれから推進していくには、住民の地域機能を維持したい要望や要求について、具体的な相互の奉仕作業や労働行為によって可能となるかもしれない。NPOによる、取り組み方の提案づくりと決意の次第にあると考えている。

老世代交流会について

- ◎交流会を開催して、まず生き甲斐は、それぞれが生活しているスタイルを強く意識するものではなく、「まちなか」と「中山間地」で生活環境の違いを確認しながら、「むらじまん」、「まちじまん」をこれからも語り合える交流こそ大切である。集会施設が整っている点と生産的な取り組みに継続したいとの要望が強いので、柔軟な発想と他地域の取り組みや研修を重ねていくことで慌てない老世代グループが確実に今後の展開の発展につながっていくと確信できた。

